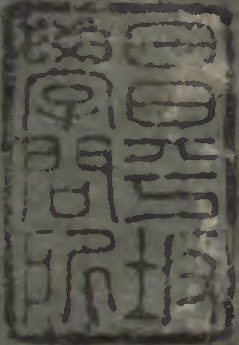


味綺集

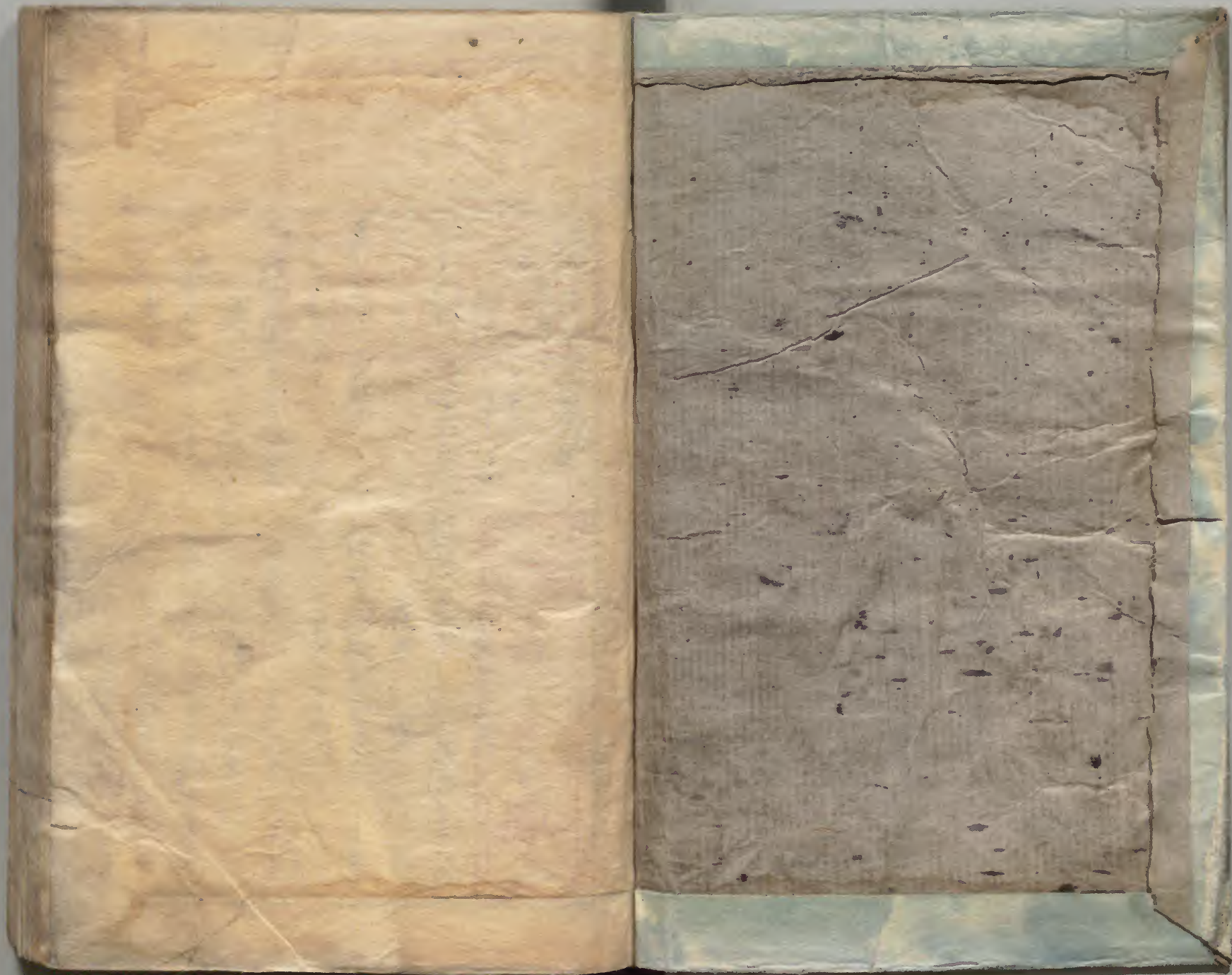
下



内閣文庫	
番 號	和 25344
冊 數	2 (2)
函 號	200 32



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



此の御こととまゝに奴等が御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

一 此の御こととまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

あつたれ物

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

読人

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

人乃まゝにまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

困死左大臣 冬副

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

後撰下

わづらひてまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

女は許小はり

人乃まゝにまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

女

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

女乃まゝにまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

あつたれ物にまゝに御いふにまゝにまゝのいづくにゆく

そなたの御心

かき

おれは日頃おかしき事なればと申すは御心なれば

御心なればおれは御心なればと申すは御心なれば

御心なればおれは御心なればと申すは御心なれば

御心なればおれは御心なればと申すは御心なれば

左兵衛督御心なればと申すは御心なれば

左兵衛督

御心なればおれは御心なればと申すは御心なれば

御心なればおれは御心なればと申すは御心なれば

後撰下

在京の方

おれは日頃おかしき事なればと申すは御心なれば

戒仙は

おれは日頃おかしき事なればと申すは御心なれば

御心なれば

おれは日頃おかしき事なればと申すは御心なれば

おれは日頃おかしき事なればと申すは御心なれば

おれは日頃おかしき事なればと申すは御心なれば

御心なれば

おれは日頃おかしき事なればと申すは御心なれば

下はうーし

アハハ

伊せの海に一もあくあまのふら衣る類はまはれあてぬる式

昔はうーし

おれの子

わらうかすまーし一思ふおおもふんはあまのこ

人乃まことまへる人をあひ一言てはうりー

左に 李繩女

から衣る一きめぬ何うぬ人乃つまとはおまふおまふら

人乃ま一おまふおまふにまのまのすまてまのい

まはまはまは一いおあけし一いんまのあま

はるかたりて又あ一にうーし

後京まわ

あらかははは一し一おれとはははは一し一ま

後撰下

あの一一思ははる女の一るぬやうはんえははれと

いん一し一ま

後京一まわ一の一おれ

いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

ま一いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

とさへ

つ一ははは一し一おれとははは一し一ま

ま一いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

ま一いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

ま一いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

ま一いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

ま一いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

いん一ま一あははは一し一おれとははは一し一ま

うまきり哉と一や歌と

〇二〇

かきとふかきとふかしむるあはれなき持事なほかきひの御
人乃さるる心くわたりけしきいふといふ人をいつ
て

懐人〜らひ

人かぬつまのあひのあはれをいそめてまつきてうまきりかひ
ぬたなれぬ御歌をこほりてはふふさかぬ角一と
ぢ〜

歳末真志のさうぢ

山がふかきあひのたふさくつる雲井たたらもあまれとわをん
まら〜あはれさう〜ふとほり〜さう〜しをわゆるこ
とみつとめあはれいひのさ〜〜は歌

さう〜ちか御は

後撰下

あはれは涙のゆ〜〜のあはれなき歌は山も神楽御は〜ま

たい〜ま

源乃きのみ

あはれとて御歌のあはれさうなりなま〜人あはれとてつ
〜〜〜付る女は山を御まに

与り人〜あ

あひねの〜あはれあはれとて御歌さうの時乃〜山〜もあな
〜

せいと〜次

〜御

玉座のあはれ〜御歌あはれ〜はな〜ひも我は〜御歌
紅内親王 一平三郎

山のおはれな〜御歌あはれ〜はな〜ひも我は〜御歌
〇三三

人のまはらわらへしきりしきりまのあはれ
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれ

ゆきまはらわらへしきりまのあはれ
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへりてあはれしきりまは
かへりてあはれしきりまは

かへり

かへり

今もいふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

古くは

あつていふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

読人

あつていふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

後系後藤

あつていふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

此乃若まににあつていふにやうに

右大臣

あつていふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

建

元平

あつていふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

太

子

あつていふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

女

深

あつていふにやうなものはおの風をのびていふやうに
なるといふはあつていふにやうに

女

深

からうまはらふあはの世は何なるか
女のまににまゐるなるよをわくねとのいひを
か

あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを

あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを

あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを

左大後

あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを
あはれにまゐるにまゐるよをわくねとのいひを

左大後

返^りては^葉侍^りたる^葉葉^葉の^葉又^葉か^葉な^葉て^葉の^葉ま^葉り^葉
み^葉お^葉れ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉に^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉

侍人

あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉い^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉

かぢり

あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉

源

かぢり

源巨城

あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉

侍人

あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉

あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉
あ^葉は^葉な^葉ら^葉う^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉の^葉ま^葉り^葉

〇十四

昔ね未ね何事かたはりの世はまの月を夜はなひ夜

女一うたう一きき

續吉政大治

ひなまはにきくしきくおのまの命は山家以下

也一

いせ

わやうなのむしうは君一りら世のなが一はり一きき

歌一

とみ人毛三春

と世方の小神をのこまはてなれおのまのまのまのりて

はまのりておのまのまのりて

紅なまのりておのまのまのりて

のりて

と世まのりておのまのまのりて

あひまのりておのまのまのりて

後世下

今もあひかえとかがえはるるゆきをていては

そ一きき

いとの世はまの月を夜はなひ夜

あま雲はるるまのりておのまのまのりて

あま雲はるるまのりておのまのまのりて

かこふるるまのりておのまのまのりて

何れまのりておのまのまのりて

あひまのりておのまのまのりて

神歌

あひまのりておのまのまのりて

昔の世は

あひまのりておのまのまのりて

かたむきくくくくくくくくくくくくくくく

なすのせきからんあまはれはゆきゆきゆきゆき

あふくくくくくくくくくくくくくくく

そかたふくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

きんじんじんじん

もくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

なまけくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくく

坂上法のかき

あふくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくく

平まねの物話

あふくくくくくくくくくくくくくくく

〇十四

あふくくくくくくくくくくくくくくく

平かぬきうきうのわらわのくさくさのくさくさ

秋風のふりしるしのくさくさのくさくさのくさくさ

女にさかきりしるしのくさくさのくさくさのくさくさ

中かぬきうきうのわらわのくさくさのくさくさ

女にさかきりしるしのくさくさのくさくさのくさくさ

なまきりしるしのくさくさのくさくさのくさくさ

わらわのくさくさのくさくさのくさくさ

あぬきうきうのわらわのくさくさのくさくさ

女にさかきりしるしのくさくさのくさくさのくさくさ

あぬきうきうのわらわのくさくさのくさくさ

女にさかきりしるしのくさくさのくさくさのくさくさ

あぬきうきうのわらわのくさくさのくさくさ

乃とておと城のいひまゝなりきりて

言おれはついでに城をかくるぬらむとて居る事ゆゑ

人の世もあはれまゝのいひかゝりけるを

おまじきとていひまゝのいひまゝかゝりける

風をいひまゝのいひまゝのいひまゝのいひまゝ

はゑんと女のいひまゝかゝりける

後人なむ

おまじきとていひまゝのいひまゝかゝりける

おまじきとていひまゝのいひまゝかゝりける

おまじき

こゝにやまゝかゝりけるいひまゝのいひまゝ

女にいひまゝのいひまゝのいひまゝ

人乃とていひまゝのいひまゝのいひまゝ

結をいひまゝのいひまゝのいひまゝのいひまゝ

大に千里のいひまゝのいひまゝのいひまゝ

なりていひまゝのいひまゝのいひまゝのいひまゝ

まゝにいひまゝのいひまゝのいひまゝのいひまゝ

れゆゑいひまゝのいひまゝのいひまゝのいひまゝ

かゝりける

こゝにやまゝかゝりけるいひまゝのいひまゝ

かまほりたるまきぬを千里にほくたかきたりに
まてふをよとくひるん之りまらるくわうとんら
はまきなりてぬんあつととるるにひひなり
て付まきぬをなめてひまきなり

ねのしほのまといひてもあまほし中くたふあまほし
やまといのかまほし何かぬまぬあまほし
まぬ城むくんとまきなりてぬんあつととるるに
あうらほまにまぬあまほし何かぬまぬあまほし
まぬ城むくんとまきなりてぬんあつととるるに
かまほりたるまきぬをなめてひまきなり

九度胡語

いしほのまといひてもあまほし中くたふあまほし

まぬ城むくんとまきなりてぬんあつととるるに
あまほし何かぬまぬあまほし

まぬ城むくんとまきなりてぬんあつととるるに
あまほし何かぬまぬあまほし

まぬ城

まぬ城

まぬ城むくんとまきなりてぬんあつととるるに
あまほし何かぬまぬあまほし

まぬ城

まぬ城むくんとまきなりてぬんあつととるるに
あまほし何かぬまぬあまほし

まぬ城むくんとまきなりてぬんあつととるるに
あまほし何かぬまぬあまほし

まのくもるを何とあえけりなれど

道風 二六十一

なまはまんとはなはれぬのさうかき何さゆり
そのいんともまるとなりなれとほななな
ちうはまかたをわたりなるといふは
かきかよさるおちをいほけいしうさるあせな

返

大輔

なまのいささきりかきん
大輔うきとにうき

敦志約治

はまのいささきりかきん
はまのいささきりかきん

後撰和歌集卷第十三

恋五

歌一

抄元

在東葉平約治 枕巴天臣松塔

いのはまあまのまのなにかはなさうきみかかつ
かき

伊勢

秋のけのおまかたのいさのほはな
はまのいささきりかきん

まのいささきりかきん

まのいささきりかきん
まのいささきりかきん

まのいささきりかきん

なまのいささきりかきん
なまのいささきりかきん

小町小町

恋五

さういふ御時を思ふに
女にうたれどもて付き
ふらふ

あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで
みえなから粧ひを
讀人

しほのついで
なつて

あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで

若輔朝臣

あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで

あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで

あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで

若吉波大臣

あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで
あはれむらゝのついで

きく〜あ

かひきく〜あ

〇廿七

松よてめおとさうしんせいのあまのこゝろいふるにせえ

読人〜あ

おもんと物も松よてめおとさうしんせいのあまのこゝろいふるにせえ

をとりあひまにまうしんせいのあまのこゝろいふるにせえ

てい〜あ

今まも松よてめおとさうしんせいのあまのこゝろいふるにせえ

〜あ

あまのこゝろいふるにせえ

うつりあひまにまうしんせいのあまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

たい〜あ

あまのこゝろいふるにせえ

女〜あ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

あまのこゝろいふるにせえ

〇廿五

歌一

なる神女もあまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あえのふ教日人平はかき

雨あれゆれとぬきわの神のかるおまひかまのぬきはるた

は

つねたよりぬき入神のかるぬき君うねきしあはれおす

女はまにまはるあまのついではかき

みまきりはあは

はあまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

あまのついでにむすぶてしはあふのつとせとあ

うみのねらふまきゆるかやう火乃ふもつらにわらふ
かそこのまじり敷をみはなほは海へ若くはさきさき
あまの敷さうのうへふたぬはゆかきばみせしとあま

又也

まじり敷

後撰和歌集卷第十四

恋六

人乃まことに法あり事

まじり敷

あまの城をみゆりてあまのまじり敷とあまのまじり敷

返

あまのまじり敷のまじり敷はなほはあまのまじり敷のまじり敷
あまのまじり敷のまじり敷はなほはあまのまじり敷のまじり敷

あまのまじり敷のまじり敷はなほはあまのまじり敷のまじり敷
あまのまじり敷のまじり敷はなほはあまのまじり敷のまじり敷

〇三十五

きくら後

此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり
まのいひしに女は許さしおのふら
此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり
女は許さしおのふら
まのいひしに女は許さしおのふら

右大後

かゝる世に生れしは皆て人の世に生れしなり
まのいひしに女は許さしおのふら
此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり
女は許さしおのふら
まのいひしに女は許さしおのふら

此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり

月あはれおのちにおほくはなれ
何れかて人なつかしき世
読人不老

此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり
まのいひしに女は許さしおのふら
此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり
女は許さしおのふら
まのいひしに女は許さしおのふら

此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり

此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり
まのいひしに女は許さしおのふら
此の世に生れしは皆て人の世に生れしなり
女は許さしおのふら
まのいひしに女は許さしおのふら

三十七

返一

とみ人

志事^{しじ}の^し心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
し^しの^し心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
て^て女^にれ^れし^しの^し心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん

し^しの^し心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
ね^ねり^りの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
は^はの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん

おとけ

志^し事^じの^し心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
し^しの^し心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
お^おの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん

ゆき

夜^よの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
い^いの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
お^おの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん

に

源

我^わの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
と^との^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん
お^おの^の心^{こころ}を^した^たく^あれ^れ祈^{いの}り^かと^とる^るに^個方^{かた}も^もん

〇三十八

まうあひのしあはれなるかひ人乃あやもなま
女れあはれなるはまにわおあなひ
あはれ

ちまあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれ

千早振神あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
女れあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

人々皆驚きけり

昔の如くは云ふ事なきに似たり

宇治の事もいふ事なきに似たり

請人 （註） 昔の事

女 （註） 女 （註） 依子

耳 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

女 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事

昔の事 （註） 昔の事

昔の事

わしは人かたしきしきもあはれはつらきものなるぬかへるあはれ

ぬかへ

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

人かたしきしきもあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれは

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

右を

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

あはれは

あはれはつらきものなるぬかへるあはれはつらきものなるぬかへる

女とも話とまにを論りて

かすらぬおまひいりあやもかきねるあはれよこころあはれ

返

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

元もはるふ友けささささささささささささささささささ

南丸成りぬれぬこの女

わろそく地あそびの国に友なるもおれおれおれおれおれおれ

かときそあひまきとわさし海にさささささささささささ

さささささ

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

人城いひさしおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

らあしてあはれにささささささささささささささささささ
川うらふ歌
源廣の朝歌

返

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

返

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おはれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

子の先^{さき}なり^かき^か人^{ひと}

ゆゑに^{ゆゑ}い^いふ^ふま^まの^の人^{ひと}は^はあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のは^はら^らの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

いと^{いと}あ^あら^らわ^わぬ^ぬか^から^らい^いふ^ふま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

人^{ひと}を^をあ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

ま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

右に

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

あ^あら^らわ^わぬ^ぬま^まの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬは^はの^のあ^あら^らわ^わぬ^ぬ

まじりつものおもひもさるるもあはれなるはあはれなる
うけしつ付き女文はくし付しつあはれなる
てはなふゆふあはれなるけり
わらひ君のあはれなるあはれなるあはれなる
か
か

ふかきれはさるるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

後撰和歌集卷第十五

雜一

仁和のふかと暖暖の雨時乃ゆきとせるとはにきま
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる



婚を政大治

今まておぼしきはむしうけくたふもせりあまのきこふかた

たふかき入日可れまあはらむもぬ本城あまのきこ

外まよとせしまるる何りて敷上りり付る

時かすけの節乃まにけりり付る

平かなの記

まもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

まもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

まもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

まもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

暖味后 嘉智子

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

業平朝臣

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

あまのきこまもに候はあまのむらりゆりまはるかたあまのきこ

此のふくまをぬき入るはらひは昔はたの海をわたり

序文一 甲 勢カ

海の中を舟中へはるはるのさなはるはるの舟中の舟中
しうかかきしうかかきしうかかきしうかかきしうかかき
みまはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
まはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

乙 語カ

なまはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
月ははるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
子 川 録

いふはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
又はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
あはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

丙 示 漢 色 七 廿 九

あはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
左にはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
右にはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
あはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
あはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

丁 補 約 法

人たはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

らひきりあひにけりしすまふさふさふさ
たかひささうまひのちかひにきりあひにけりしす
小山田れきと路をともあひにけりしすまふさふさ
三系古入辰男まふさうまひにけりしす
とけり毎文入るまふさうまひにけりしす

仁喜子

かひ女侍左様おほいさうまひにけりしす
まふさうまひにけりしす
春まふさうまひにけりしす
廣の朝信中御まふさうまひにけりしす

大輔

廣明初信

かひ女侍左様おほいさうまひにけりしす
まふさうまひにけりしす
春まふさうまひにけりしす
廣の朝信中御まふさうまひにけりしす
かひ女侍左様おほいさうまひにけりしす
まふさうまひにけりしす
春まふさうまひにけりしす
廣の朝信中御まふさうまひにけりしす

大江十回

最上^君にねらふ^た花^女を^たり^てあ^らじ^くに
上^様を^おも^ひし^てし^らべ^しる^にあ^らじ^くに

若^君補^給の^旨

そ^の上^様の^御心^をあ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
法^皇御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

七條^后

今^もは^らの^御心^をあ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

御^心に^おお^しる^に

京^極の^御心^をあ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

い^まは^らの^御心^をあ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

女^子の^御心^をあ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

も^のの^御心^をあ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

あ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

あ^らじ^くに^おも^ひし^てし^らべ^しる^に
御^心に^おお^しる^にあ^らじ^くに

へねりて侍れりまの^{きよ}はら^まか^まり
 源公太郎
 小笠原古朝臣
 ねりて侍れりまの^{きよ}はら^まか^まり
 源公太郎
 小笠原古朝臣

後撰和歌集卷第十六

雑二

ねりて侍れりまの^{きよ}はら^まか^まり
 源公太郎

在系業平朝臣

ねりて侍れりまの^{きよ}はら^まか^まり
 源公太郎
 ねりて侍れりまの^{きよ}はら^まか^まり
 源公太郎
 ねりて侍れりまの^{きよ}はら^まか^まり
 源公太郎

〇雑二

おいてたまわり侍らるるけりまほあり侍り

とみ人しり

先づりやむしぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある
うらわあしほふし世教人の侍けきいまるるて

大江真俊

うらわあしほふし世教人の侍けきいまるるて
先づりやむしぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

小貳代あめ

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

あめ

大浦

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

諸人あめ

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

あめしつぬらぬ山井いしつ先かきう朽たてある

の羅二

かきう

あまきりさるるは城かとなさるるはるらにありあ
昔はさふかまのしるは城をさひかへしきれあ
ふりまうてつらうさる

おせいさるるは城かとなさるるはるらにありあ
延喜時清うま城はるりてたふくまのち
ふりねちせのからなりはれは別をらま
ありておほきさるるは城をさひかへしきれあ

ふりまうてつらうさる

おせいさるるは城かとなさるるはるらにありあ

延喜時清うま城はるりてたふくまのち

ふりねちせのからなりはれは別をらま

ありておほきさるるは城をさひかへしきれあ

ふりまうてつらうさる

おせいさるるは城かとなさるるはるらにありあ

と春

素性法師
言系敦敏

返一

大浦

かひいそちのちをさるるは城をさひかへしきれあ

あまのめいさるるは城をさひかへしきれあ

とつをかへしきれあ

とつをかへしきれあ

とつをかへしきれあ

とつをかへしきれあ

とつをかへしきれあ

とつをかへしきれあ

とつをかへしきれあ

とつをかへしきれあ

○雑二

とらん人しら

かゝりぬるふらにほたるなほたはさかきうあんとはさらん
ととつあつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
こしにわんりきせ

あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと

あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと

あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと

あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと

高津南親

あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと

暖房后

あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと

あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと
あつまついふはとあつまついふはとあつまついふはと

陽成院のまこと時へのおおきくせきせきけ
系城久しうあつたるをきれはあつたりなる

武前

はりよのむねはなほにほけ

かきぬるあつたひれはひりみえは物ま有る

まるとかひけの女のふとまのこえは信きれはま

月もあぬるを今まかあつたひれなり

きれは

とみ人しうす

なふとひのわいおいふうらみくうあ人なり

女はこらうらるんれうせ付るかひり

わさるとらあつたはなはあつたひれはあつた

むいおなわあつたはあつたひれはあつた

て人あつたはあつたひれはあつた

人たれらひはあつた

とらとあつたはあつたひれはあつた

あ

あつたはあつたひれはあつた

なまをせしあつたはあつたひれはあつた

ふくしうあつたはあつたひれはあつた

てはきれは
土左

あつたはあつたひれはあつた

ふくしうあつたはあつたひれはあつた

むろとあつたはあつた
閑院

春やうたやあつたはあつたひれはあつた

小宛 昔り筆札を

後子

〇六十一

我を成りたるはてならぬをの好らかたよおおお

か角一

枇杷左大臣

ならぬを成りたるはてならぬをの好らかたよおおお

なりぬるものにもまうりてさうよあまとい

あり小宛ふきぬまうりてさうよあまとい

きてはなぬあまをさうよあまとい

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

て尾補 釣はあまをさうよあまとい

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

かたよおおお

〇雑二

常世のまがらふぬまのしるはりに

城をさかす比地はなほしるはりにまがらふぬまのしるはりに
ねまらふと侍るる人平はかたしるはりに

後人しるはりに

あまのついでにまがらふぬまのしるはりに

あまのついでに

あまのついでにまがらふぬまのしるはりに

あまのついでにまがらふぬまのしるはりに

あまのついでにまがらふぬまのしるはりに
あまのついでにまがらふぬまのしるはりに
あまのついでにまがらふぬまのしるはりに

あまのついでに

あまのついでにまがらふぬまのしるはりに

後撰和歌集卷第十七

雑三

いそれ神といふもあまのついでにみまをさかたむけ
まゝにかへんとてはありておのちよ通昭はり
人れつを侍りまのいひを小室小町むとていひ侍る

いよの上なるいねとす我のいよむ通昭言は衣城のなからん

云城のいよむ言は衣城のなからん
法皇の小室小町かへりつゝまのいよむを侍りて
あまのちよもあまのいよむにまのいよむのいよむを
てまのいよむを侍りて

〇雑三

おとよき切しぬる叶五本葉同なほはたかすめぬ物とある

女乃許をり阿ははふと別といひは付きぬ

左大補

あはれなるはあはれなるらわぬおはす又ハはたかすめぬ

あはれなる

みかどならはたかす女をむしりぬるありまはたかすらと係

かへりおはれと付くはたかす城のひてら

一はたかすのむしりぬるをたかすいぬるはたかすのむしり

おはせぬなほはたかすはたかすハ

大補

あはれなるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬる

人のむしりぬるはたかすのむしりぬる

讀人

あはれなるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬる

あはれなるはたかすのむしりぬる

あはれなるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬる

あはれなるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬる

大補

あはれなるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬる

あはれなるはたかすのむしりぬる

あはれなるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬる

あはれなるはたかすのむしりぬるはたかすのむしりぬる

大補

漢人あは

可なり物ゆみはたしむるはかたき

歌し

未のちなげ しるはる 花か夫 逢月ふさ春なるもさ

あけら能へ侍る時 はら けのさあまらてま

侍るに

なま はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

時 はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

文屋康孝

と はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

か はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

おた

乃にむくあぬ物 はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

今乃 はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

閑院大君

毛 はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

月夜 はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

か はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

お はら けのさあまらてま はら けのさあまらてま

後撰和歌集卷第十八

雜四

かきつを切て

はく

とる人しらす

家やふあひをりてははく睦まじき世を物かたけ

人く阿まひしるき侍る女はもと不憎もなまの

まとのあまふれは後ち思ひけりたふりたふりたふり

きりきり切ておれりとききりおれり切せてはく

すて

玉はあくわーかきつを切てはわけの鏡をきりて家かたけ

をとりあひをりてははく睦まじき世を物かたけ

人く阿まひしるき侍る女はもと不憎もなまの

まとのあまふれは後ち思ひけりたふりたふりたふり

〇雜四

あつちの城をあらはしあつちのあつちのあつちをあらはしあつちのあつち
中おまへ肉おまへあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

源善親信

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

とらふ

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

伊勢

北辺左大臣信

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

讀人土

吾もあはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて

あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて

あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて

あはれなるものなりとて

あはれなるものなりとて

あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて

あはれなるものなりとて

あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて
あはれなるものなりとて

あはれ

かきつりてはまゝにほくはあけなまのてをきりて

きりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

左大臣

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

左大臣

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

左大臣

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

左大臣

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

まゝにほくはあけなまのてをきりて

〇雜四

左大臣

はちあうらふかきつそいりまき

おのゝ原のいづれ

あなはれいそきからんそあうらおほあせい

夢乳ハ

清人あふ

ふのかうはれもうらわはれおれを抽きまらぬ

けいそ

おのゝ原

いとせめてうらまきおれは衣ほれぬ人あつた

女

三月許す一はあふらうらうらあはれ

さか

いぢ人

意しくあふらうらあはれおれは衣ほれぬ人あつた

いせ

わらわはれいぢあふらうらあはれおれは衣ほれぬ人あつた

さむきぬねの千はあふらうらあはれおれは衣ほれぬ人あつた

あまかきつそき

わらわはれいぢあふらうらあはれおれは衣ほれぬ人あつた

○离别

みづと清らしくはなれ

みづと清らしくはなれ ながくゆきわたるもはらわたる

かき付まじり 後人しるす

われゆきのまじりゆきまじりゆきまじりゆきまじりゆきまじり

むゆきのまじりゆきまじりゆきまじりゆきまじりゆきまじり

かき付まじりゆきまじりゆきまじりゆきまじりゆきまじり

かき付まじりゆきまじりゆきまじりゆきまじりゆきまじり

かき付まじりゆきまじりゆきまじりゆきまじりゆきまじり

かき付まじり

神をまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじり

おまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじり

うまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじり

友をまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじり

おまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじり

まじりてわがまじりてわがまじりてわがまじりてわがまじり

〇 離別

知相ふるはかりふにこれかきつるものたれむ
きよかづりて

平字とほり平た名とりて人れらるるし
かきつるものたれむ

あひのりては人のあつるものたれむ
かきつるものたれむ

あつるものたれむ
かきつるものたれむ

あつるものたれむ
かきつるものたれむ

あつるものたれむ
かきつるものたれむ

あつるものたれむ
かきつるものたれむ

あつるものたれむ
かきつるものたれむ

〇商別

あつるものたれむ
かきつるものたれむ

あつるものたれむ
かきつるものたれむ

きらばとわきり 時をたはせし系も後まぢらねるま

讀人 一 守

春^在あをれくきらしてはれも 風うほふたきせき

返

ゆせ

免^{同上}よそぬ風よんをきく 川にやうきぬれ^ハ乳^ハもせぬ

かひまうりけい人 今 けうり

君よははのまほりにあそまねなぬゆまのいひな

ゆひまそこのまうりけい人 今 けうり

ねれまきんこのまうりけい人 今 けうり

かぢり

舟なるあまの河ももあそびに 川のまはらき

あねまきまのあまのり

かひてらたてて社とてらゆきかへる舟にのりとあそ

返

伊勢

ねこの系ハ社もせまもむ。舟出は 海まなうとあ

あふらばあまのりて 女はまとおけり

つらね

舟と社とこまむしてあまのあひんもていひ

〇 傍別

鞠歌

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

とみ人土つゝあ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

中京字無

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

あまのいぢりよ名とりて遠江玉のまはれをたし
を何まじりてあまのいぢりよ

〇鞠歌

ほらゆき

高き山をふり月を氣と海をり出てうみよる氣
法曾文にき記といふも海邊へしきる法もも

夏京の大後

みよしの山にふり月を氣と海をり出てうみよる氣
高き山をふり月を氣と海をり出てうみよる氣

付く
くせ

草枕きしむる山にふり月を氣と海をり出てうみよる氣

高き山をふり月を氣と海をり出てうみよる氣

十のうら

高き山をふり月を氣と海をり出てうみよる氣

あつちの山にふり月を氣と海をり出てうみよる氣

静法

高き山をふり月を氣と海をり出てうみよる氣

高き山をふり月を氣と海をり出てうみよる氣

僧正聖家

高き山をふり月を氣と海をり出てうみよる氣

〇攝錄

とつて

はらゆり

つる月かきくむきハわまの河出の月影ハ海をありき
草花さくらむらやきさくらんをさくらんをさくらんや
素に招き入はくとほきあがりてまきまきんたふら
ふとちりて九月詩よ くらん人くらん

あふ人ありてむきいづらねほきさくらんをさくらんか好ま
とむ枝ゆきさくらんはなれむきやあもなるもむきさくらん
まきさくらんといふは法言おちまきさくらんをさくらん
ねかせことありて 素性法師

秋山は満ちるをみやきさくらんは秋のくらんはさくらんをさくらん
素性法師

後撰和歌集卷第二十

慶賀 哀傷

女ハのみこ元良の系はききんは四十賀し侍はききん
れむ枝かきくらんをりて

系伊衡の法

系代のさくらんをかきぬきくらんはけりるをさくらんはつて
典侍ありてさくらんをさくらんは事お乃ききんは賀し侍

け系法言の裳かきさくらんはけりてさくらんは
ききんは

典侍ありてさくらんは

雲わらわさくらんはさくらんはけりてさくらんはさくらんは
歌くらんは

左近大臣 貞信公

あくらんはわらわさくらんはけりてさくらんはさくらんは
〇慶賀

の^{武明}あまられ^{三葉}から^{三葉}あし^{三葉}し^{三葉}あま^{三葉}い^{三葉}付け^{三葉}ま

右大臣の^{三葉}れ^{三葉}う^{三葉}せ^{三葉}こ^{三葉}も^{三葉}せ^{三葉}付^{三葉}な^{三葉}ら

はらゆき

お上の^{三葉}ぬ^{三葉}も^{三葉}け^{三葉}ま^{三葉}ち^{三葉}と^{三葉}せ^{三葉}れ^{三葉}さ^{三葉}す^{三葉}る^{三葉}人^{三葉}の^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}い^{三葉}か^{三葉}う^{三葉}あ^{三葉}け^{三葉}り^{三葉}ま^{三葉}り

か^{三葉}れ^{三葉}お^{三葉}の^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}と^{三葉}一^{三葉}付^{三葉}な^{三葉}ら^{三葉}ま^{三葉}ら

讀人

そ^{三葉}の^{三葉}ま^{三葉}を^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}か^{三葉}さ^{三葉}き^{三葉}く^{三葉}ば^{三葉}ら^{三葉}ら^{三葉}ふ^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}い^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}り^{三葉}け^{三葉}。

左大臣の^{三葉}あ^{三葉}の^{三葉}を^{三葉}乃^{三葉}と^{三葉}女^{三葉}こ^{三葉}か^{三葉}う^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}を^{三葉}此^{三葉}に^{三葉}結^{三葉}ば^{三葉}ら

つねあま

ね^{三葉}ら^{三葉}ぬ^{三葉}を^{三葉}ほ^{三葉}ら^{三葉}山の^{三葉}こ^{三葉}の^{三葉}系^{三葉}を^{三葉}本^{三葉}を^{三葉}さ^{三葉}ら^{三葉}れ^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}け^{三葉}え^{三葉}

人^{三葉}れ^{三葉}か^{三葉}う^{三葉}あ^{三葉}り^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}い^{三葉}む^{三葉}城^{三葉}を^{三葉}さ^{三葉}ら^{三葉}て

らる人

つ^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}き^{三葉}よ^{三葉}み^{三葉}の^{三葉}千^{三葉}代^{三葉}の^{三葉}風^{三葉}を^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ら^{三葉}え

女^{三葉}れ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}ら^{三葉}い^{三葉}け^{三葉}。

君^{三葉}の^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}き^{三葉}よ^{三葉}み^{三葉}の^{三葉}千^{三葉}代^{三葉}の^{三葉}風^{三葉}を^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ら^{三葉}え

は^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}き^{三葉}よ^{三葉}み^{三葉}の^{三葉}千^{三葉}代^{三葉}の^{三葉}風^{三葉}を^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ら^{三葉}え

は^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}き^{三葉}よ^{三葉}み^{三葉}の^{三葉}千^{三葉}代^{三葉}の^{三葉}風^{三葉}を^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ら^{三葉}え

左大臣の^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}き^{三葉}よ^{三葉}み^{三葉}の^{三葉}千^{三葉}代^{三葉}の^{三葉}風^{三葉}を^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ら^{三葉}え

僧都 仁教

今^{三葉}よ^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}あ^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}の^{三葉}い^{三葉}は^{三葉}き^{三葉}よ^{三葉}み^{三葉}の^{三葉}千^{三葉}代^{三葉}の^{三葉}風^{三葉}を^{三葉}ま^{三葉}ら^{三葉}あ^{三葉}ら^{三葉}え

左大臣

〇慶賀

君の宛いふに御事なりしに御事ありては

御事一

今上御事 天曆

今上御事一に御事ありては御事ありては

今上御事一に御事ありては御事ありては

今上御事一に御事ありては

今上御事一に御事ありては御事ありては

御事一

御事一

今上御事一に御事ありては御事ありては

今上御事一に御事ありては御事ありては

御事一

今上御事一に御事ありては御事ありては

今上御事一に御事ありては御事ありては

御事一

御事一

今上御事一に御事ありては御事ありては

今上御事一に御事ありては御事ありては

御事一

今上御事一に御事ありては御事ありては

御事一

御事一

今上御事一に御事ありては御事ありては

〇慶賀

哀傷歌

あつらひ多まらるる城まゝささるあつらひ
馬をかり侍を託ハ 左大臣
まゝに人あつらひさしあつらひささるあつらひ
あつらひあつらひ一條りあつらひ

左大臣

春のあつらひつと三春あつらひあつらひあつらひあつらひ
可有作者放諸本無之

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
先帝あつらひあつらひあつらひあつらひ
三條大臣

返一

总輔物言

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

時望物言

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

○哀傷

かゝるもの人へはさういふ事

いせ

〇九十

なほ人の心をいへぬおとあはれう^{おん}涙をさうしてうへ
おまこふ侍の母おちりてはかおこもる事
ひよりゆくとさうけきお里おのれらひて人をも
法曹お清ふくめりける時よひらけさいてふかいて人
おちり侍る

京極侍息下

まゝうたの心もさうおのれはけし^{おん}物さういふ事
女おのれさうのかうお侍る事とよ

お天治

まのふもて千代ちさし^{おん}君さういふ事
先坊さういふ事とよ

あゝおん^{おん}さういふ事
おのれさういふ事
おのれさういふ事
おのれさういふ事

大輔

おのれさういふ事
おのれさういふ事
おのれさういふ事

言上お侍女

おのれさういふ事
おのれさういふ事
おのれさういふ事

殿京古文

おのれさういふ事
おのれさういふ事
おのれさういふ事

侍女

おのれさういふ事
おのれさういふ事
おのれさういふ事

〇哀傷

てうねわさるゝのちりて

清原ゆゑ

引うおーふるそのねをわらぬ君うちとをのなきき世はよ
そのはしくにかゝる人

君まゝてまはねおとぬはまじきぬ抽かざるけりか
人のとやらひはあそびけりきりたかく
有りおふとしひはきれかかそそぬきみまじひき
付る

戒仙法師

すはよけるを林もさうらに社をきわめいるまな
なくぬりて付る人のいゝまふあり付るおあ
ぬれあさ日人といひき付る世は

上人

社がく町なりけりおあまはぬを雨も思えよりま

なれいんそそそそあひはかりん
お里よあいつちとまらとつしきあうられあといは
教を知はすありて又はとつれおはのをぬる

あの人とそそれかきまらてそのかりし付る
教のしに人付る 清原

君さしりおつせそそそおれゆなまおとんおれさ
おれおれさよあまあまあまあまあまあまあま
ま話にもおるゆゆそのこと人れりひけき

上人

やい人のきもにさるるおれをいふものもさしりかえは
か

〇哀傷

をよむを神よはひしう 後夜をみるにむもみえはるあはし

歌しつゝあ

いせ

ほよめれはしもおとぬぬおれもおれもはひ成かおれも

人をなごめかかろくさくしておきいひをそ

はるの由え下みえいせを招もいせも人よかか

といひはかりきりきれい 言上おれ女

時のおもなをけえつらんおれをさるもいひぬるかか

あー

大補

世つさぬくさむくもおれをけさるもいひとみぬれ

ありしをけしきりきりきりきりきりきりきり

いせ

かきえはよむおれおれといひおれとていひおれとていひ

一はひはるしおれいひおれおれおれおれおれ

おれいひおれおれおれおれおれおれおれおれ

なくさるうて海にのちぬと書れりなりおれとていひ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

なき人おれもかかおれならはるおれおれおれおれ

あー

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

〇哀傷

天曆五年十月晦日於昭陽舍撰之為藏人左
近少將藤原伊尹別當
寄人讚岐大掾大中臣能宣河內掾清原元輔
學生源順近江少掾紀時文御書所預坂上望
城水也謂之梨壺五人
奉行文禁制文木略之

兼久三年五月廿一日午時書之
于時天下大徵之

天子三上皇皆御同所白旄翻風霜又耀日如微
臣者紅旗征戎非吾事獨卧私廡暫扶病身悲矣
火炎崑岡玉石俱焚猜思殘涯只拭老淚
此集无尋常之本為備後輩之所見今日書寫之
去六日書始之 同廿四日校了

以此本重書寫已四々度

- 一本進仁和寺宮
- 一本進前授政殿
- 一本付屬嫡女
- 一本傳于嫡孫
- 三々年之間凌老眼五度書之

此集故者公卿皆書名朝臣字古今又此躰欵
枇杷大臣歌戀部与伊勢贈答書業平朝臣名如此事後
代之人或推而直之是非書寫之誤此集本說也
不可改直
作者名字亦家々本多相替隨所受之說書之
同歌入兩部古今歌加入如此事只隨本也

嘉祿二年六月十七日書寫了同廿一日校合了

散位藤魚長綱

仁治元年十一月三日書寫了寛元二年六月廿日
校合了

此本為相卿自筆之寫也以此村氏抄并校行之本小本異同校書于側

作者名位録元注并抄注也兩注無之人者以作者部類補之部類亦不見者缺之

藤原敏行抄大内記 陸奥守富士九子 〇九河内躬恒作五位先祖不詳

淡路權掾 藤原敏行 陸奥守富士九子 為大君天曆婦本姓之 〇左大

臣小野 〇行明親王抄平篤行子袋草子兼盛以王氏 為大君天曆婦本姓之 京極御息所抄重明親王弟也

紀友則作六位大内記 宮内權少輔有朋男 〇兼覽王母作兼覽神祇伯 宮内卿上四

位下惟喬 親王御子 〇開院左大臣作正一位冬嗣 右大臣内六呂男 〇藤原兼

輔中納言左工門督兼平三年薨 抄左中將利基子号堤中納言 〇紀貫之作五位木工頭 望行男 〇伊

勢抄藤原純蔭女 七余后女房 〇素性法師抄通昭子 〇朱雀院兵

部卿親王敦固 寛平第五 〇紀長谷雄中納言 抄延喜十年 中納言彈正忠彬範

〇作者

子 ○坂上是則

作五位加賀守 好蔭男

○藤原雅正

抄中納言兼輔子

○藤原扶幹

大納言按察 天慶元年七月薨七十五

○藤原伊衡

工督天慶九十二月薨六十三 左中將敏行子

○僧正遍昭

抄良岑安世子 俗名宗貞号良少將

○河原左大臣

融 嵯峨源氏 抄負觀十四任左大臣寬平七年薨

○菅原

右大臣

延喜廿二年四月贈右大臣正二位正曆四年五月贈左大臣正一位十一月贈太政大臣

○大將御

息所

藤能子 女御先更衣 三条右大臣女仁喜子弟也

○藤原師尹

後小一条左大臣 天曆二年權中

納言左兵工督 抄負信公子 錄此哥時名欵 仍不直改

○衛門御息所

能子同人云、父右工門督之時為更衣而所名不同雖有不審此集注

○宮道高風

抄右京亮 至天慶三年

○藤原與風

作六位河內大 攝相攝下

道成 男 ○春道列樹

作六位文章生壹岐守 雅樂頭新名男

○藤原顯忠

母 ○大日乃君

惟喬親 王女

○清原深養父

抄右輔祖父 豐前守房則子

○源信明

抄陸奥守四位 公忠子

○橘公平女

陽成第一三品兵部 卿天慶六年薨五十

敦忠

權中納言本院贈太政大臣三男 天慶二參議左中將五年權中納言六年薨卅八

○在原元

方

抄棟深子 葉平孫 定方兼左大將 內大臣高藤三男

○源清蔭

○三條右大臣

定方兼左大將 內大臣高藤三男

○源仲宣

○良峰義方

兼平六年右少將天慶二藏人 六位四左少將八年右中將天

○大春日師範

作六位御書所預 隼人

○藤原

天皇孫延長八右少將 兼平六四位右兵工督 慶九年卒 抄天曆九年卒

○作者

○作之一

○作之二

高經藏人頭從四位下右兵工督 ○壬生忠岑作六位散位安綱男

○藤原安國抄伊与次連永男左工門權佐 ○太政大臣貞信公忘和二年薨

贈正一位抄昭宣公子 ○大江千里作六位兵部大丞參議音人男 ○在

原業平作四位左中將河保親王御子 ○閑院抄右京大夫宗于女 ○源中正

近衛右大臣孫 ○藤原兼三抄陸奥守四位中納言山蔭子 ○小野道

藤原元善宮内卿從四位上右京大夫是法男中納言葛野产呂曾孫 ○近江

風作四位大貳葛信男 ○藤原守文作五位右馬以有鷹男 ○近江

更衣源周子右大弁唱女生時明親王内親王三人 ○右大臣九条抄師輔公貞信公息

大輔抄前坊御乳母但馬守源綱女 ○前中宮宣旨抄中宮温子女房

藤原宗子抄右京大夫是忠親王子 ○文屋朝康抄康秀男 ○小

野美材抄參議岑守子 ○紀淑光望失抄中納言長谷雄男兼平四年參議 ○藤

原清正抄兼輔卿子 ○枇杷左大臣仲平兼左大將昭宣公正男

在原棟梁抄左工門佐筑前守兼平息 ○藤原忠房延喜十一年左少將十八年四

位入古今 ○右近少將季繩女 ○平伊望女伊望大納言天慶二年薨

昔以兼香殿抄淡路守參議等子 ○源整抄攝津守左工門佐參議等息

源濟抄淡路守參議等子 ○藤原忠行抄少納言兵部大輔遠江守有貞子延喜六年十一月卒

○千兼女抄千兼忠房子 ○增基法師 ○大江千古抄伊

參議音人子 ○藤原蔭基抄春官藏人日向守相模守博文子 ○駿河 ○

○作者

○作之三

藤原かほみ抄賀徒見命婦 ○三統公忠作五位大外記 ○桂

の足乙孝子内親王抄宇多皇女 ○紀比呂乃と抄陽成院御乳母 ○平

貞文抄左兵工佐好夙男 ○贈太政大臣時平本院左大臣左大將抄昭宣公男延喜九年

四月四日日薨 ○源頼女タム ○敦慶親王抄二品式部卿玉光宮宇多皇子

○是忠親王光孝第一元中納言一品式部卿延喜九年出家 ○土佐○源等ヒトシ

參議右大弁中納言希子 ○中務作敦慶親王御女 ○藤原輔

天曆五年薨七十三一本輔仁抄母參議玄上息 ○本院の右京抄重親女 ○橘敏仲

文抄中納言公頼男伊賀守 ○藤原顯忠本院大臣二男富小路右大臣 ○平時望

權中納言抄兼平七年任 ○小町姊 ○大江朝綱參議天德元年薨七十三從四位下王淵

男 ○貞元親王清和第三母參議治部卿仲統女美平元年薨開院三のみ ○抄カ

六十五抄贈中納言廣相子 ○中將更衣參議伊衡女 ○藤原千兼カマ

左京大夫忠房男 ○藤原滋幹大納言國經男延長六年右少將兼平元年卒 ○藤

原兼茂參議右兵工督延長元年薨 ○橘實利抄大舍人頭春利子 ○大友

黑主抄天智天皇五代大友皇子曾孫都堵九子 ○藤原治方抄少納言大藏少輔經

邦子 ○源淳抄肥前守精子 ○源俊少將使宣旨右大弁唱子 ○源重光

前大納言康保元參議元左中將代明親王子長徳四年薨七十六 ○藤原有文抄上野公右大臣宗氏子

○藤原忠國抄陸奥守連並子 ○小八條御息所抄民部卿昇女

○作者

○作者

○作之四

源 庶明 權中納言抄廣幡中納言
三品齊世親王子 ○本院侍從 作兵工督
棟源女

○清原諸實 作六位 ○藤原伊尹 己升抄謙德公也天德四
年八月參議左中

○まゝなりの女 ○在原行平 致仕中納言
阿保親王男

○平中與 ナカキ左門權佐
藏人頭右大弁季長子 ○小野好古女 作好
古

○小野遠與女 ○藤原師尹 了升小一條左
大臣抄左

○本院兵衛 抄重之女
抄兵工 ○兼茂女 ○

戒仙法師 抄大和物語兵
工佐子云々 ○藤原守正 兼輔卿男 ○藤

原俊蔭 作四位
中納言有穗男 ○伊衡女 ○藤原真忠

妹 真忠天曆元年右少將五年左馬頭
右大臣恒佐四男 ○藤原師氏 大納言兼大傳
按察天曆元年

源 賴 作六位 ○紀内親王 作桓武帝
御女

小町 ○元平親王母 抄三品彈正尹湯成院諸二
母左大臣顯光女 ○下

野 作下野守源
政隆女 ○藤原有好 抄左馬助
泉大將子 ○源巨城

常景 抄長門守
守五位 ○平希世 右中弁 ○藤原成國 抄播

○兼香殿中納言 ○源善 左近中将寬平
本左右持昌

○春澄善繩女 善繩貞觀二年參議武部大輔十二
年從三位同生院七十二

○女五のみ乙 ○負教親王 抄清和私子

條 抄貞平親
玉女 ○源英明 右近中将前藏人頭齊母親王一男
天慶四年中弁菅丞相女

○藤

○作者

○作之五

原為世抄忠相男 ○俊子抄或乃自子 大江玉淵女 ○本院此と

ら ○寛湛法師母抄中納言 公頼室 ○少将内侍 ○内侍平子抄イハレキヨコ 伊賀守藤 有家女 ○藤原朝頼

右兵工督 ○兵衛兼茂女 ○宇多院女五の尺

乙依子宇多皇女鬘官母更衣貞子 大納言昇茂平六年薨 ○藤原真忠抄子 ○南院

式部卿のみこ貞保式部卿清和第四 母同陽成延長三薨 ○藤原

時雨トキフル 作五位備後守 四服男 ○嵯峨后嘉智子仁明母后嘉祥三年崩贈太 政大臣橘清友女六十四 植林皇

右參議治部卿 右大弁顯忠子天曆五藏人少将 天德三十七中將天禄三參議天延三薨五十七 ○七條后温子昭宣 公三女寬

○蟬丸 ○右衛門作加賀守源 兼胤女 ○藤原元輔

○大江玉淵女 ○藤原滋包女

○齋宮のみこ柔子 延喜同母 ○敦實親王武部卿寬平第 八天曆四年出

家康保 四年薨 ○四條御息所作小野宮 其頼女 ○敦忠母棟梁 女

源公忠抄号滋井右大弁 大藏卿因紀子 ○中宮宣旨 ○大江興

俊抄甲斐少目 ○小貳乳母 ○藤原敦敏藏人右少 林清慎公

子母時平大臣女天慶六年左少将藏人九年又藏人 十一月正五位下依紀因司天曆元年薨三十 作四位

○高津内親王桓武天皇 二女 ○輔臣朝臣

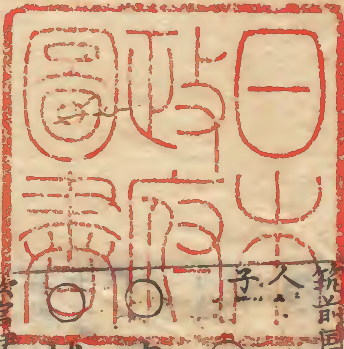
○武藏 ○セのるれ君清和院君 ○兼忠母

山法 師兼忠參議治部卿貞元親王子 妙昭宣公女天德二年薨五十八 ○ひのき子炬

の乳母 ○作者

○作者

平九年為皇后延喜 七年崩三十六



○作之六

○真延法師 ○行明親王 抄寬平皇子母京極御息所為延喜御

源昇 左大臣繼二男大納言民部卿 延喜十八年薨六十 ○閑院大君 宗子

文屋康秀 作六位縫殿丞 縫殿父宗子男 ○上野岑雄 作六位

北辺左大臣 信實職第一貞觀十一年薨五十九 ○藤原忠國 抄齋

○小町のうまこ ○均子 比良子

喜十 中連永子 ○山田法師 ○橘直幹 抄式部大輔從四位下 長門守長成子

大窪則善 作四位勳鮮 由次官 ○真靜法師 抄御導 ○中

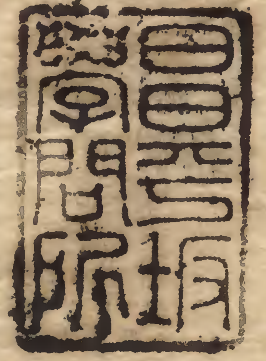
原宗與 作六位 ○僧正聖寶 作東大寺大僧正 恒蔭王子 ○典

侍あさら 抄御別當 ○惟濟法師 ○

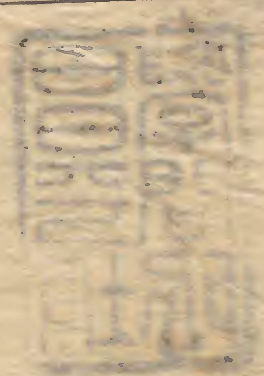
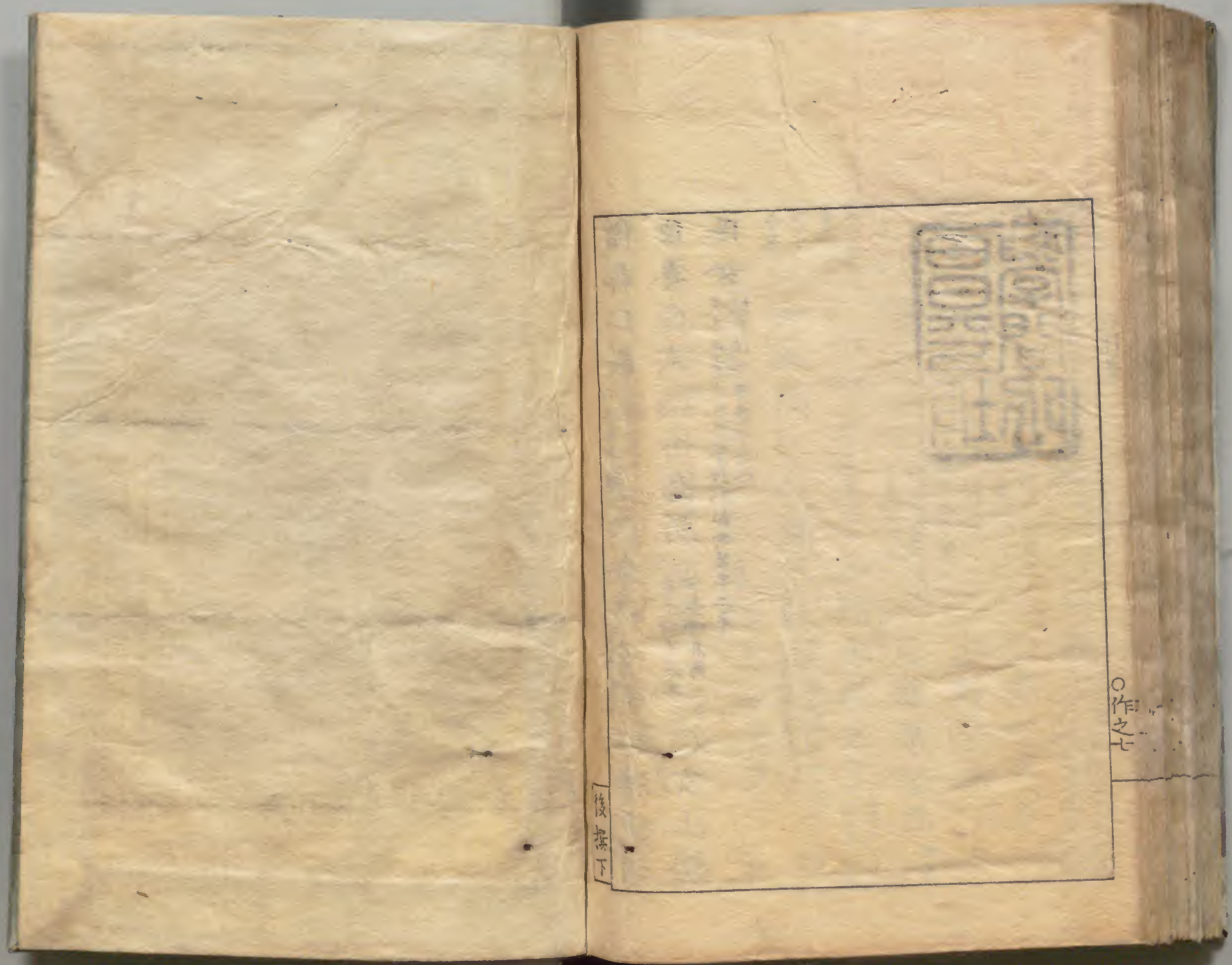
僧都仁教 作但馬守藤枝守子 ○命婦清子 ○時望朝

臣妻 ○京極御息所 抄懷子時平公女 宇多御息所 ○玄上朝

臣女 玄上延喜十九年參議刑部卿兼平二年 從三位三年薨七十八



○作者



Faint vertical text within a rectangular border on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are difficult to decipher but appear to be arranged in columns.

〇作之七

後標下



庫	文	閣	内
二 〇 函	二 冊	二 五 三 四 號	和 書 類
大 架			